大阪故鉄・諸福工場、開設10年、Next 10を目指して

大阪故鉄株式会社（矢追徹夫社長、本社=大阪市）の諸福工場（大阪府大東市）が本日、開設10年の節目を迎えた。今年4月から着手した工場外周の緑地化など環境整備(美化)工事も完成し、新たな10年を目指す。

諸福工場、開設のコンセプト

98年（平成10）11月4日開業した。「スクラップはハンドメイドの製品ではないが、いったんヤードをくぐったモノはメーカーの原料となる成品である。大阪故鉄は成品管理・品質管理には徹底的にかかわる。工場建設も前例にこだわる行政との煩瑣なやりとりにかかわらず、粘り強く作り上げた。仕分け・整理は管理能力であると共に、労働安全対策でもあるからだ」

「基礎工事、土間打ちには鋼材・費用は惜しまなかった。振動の発生源となるギロチンなど機械下には直径60cmのコンクリパイルを10数本打ち込んだ。建屋も分厚い鉄骨コンクリ（高さ6m×暑さ30cm）で囲った。壁面はむき出しとせず、遮音材を張り付けた」

「防震、防音には近隣から一言のクレームもこないように万全の備えをほどこした。隣地の境界から3m下げて建屋をたて、オープンスペースとして残した」

「『下げるのも付き合い。いわば誠意です』と矢追社長は言う。肩いっぱい押すのではない。謙譲の思いを企業・工場のかたちとして見せた。大阪の商売人である。それで企業イメージがアップするなら、決して損な出費ではない」と本紙は98年10月特集号（「大阪故鉄、諸福に新ヤード開設」73～74P）で報じた。

どこに金を使うか

開業敷地面積は約5,000㎡。ここに高速型1250㌧圧ギロチン、300㌧油圧プレス、80㌧計量器を設置した。当初の導入は土地代を含め約22億円を必要としたが、基礎と環境に配慮すれば当然の出費だったろう。

その隣接地が昨年暮れに売りに出された。隣地なら3倍だしても買えという。さしあたって設備増強や置き場拡張の計画はないが、しかし手をこまぬけば第三者が隣地に進出してくる。将来の安定操業や近隣との関係、さらに工場レイアウトの自由度を考えた場合、4億円を投じても、用地拡張のメリットは大きい。

企業の社会的信用を高める

大阪故鉄のトップは先代（矢追欣爾氏）、現社長（徹夫氏）と鉄スクラップ業者の全国組織である日本鉄リサイクル工業会の要職（関西支部長）をつとめた。

いわば業界を代表する企業である。企業収益を高める努力は当然だが、同時に近隣住民や環境整備など社会的な信頼感の醸成にも万全の配慮を怠らない。それが今回の諸福工場の隣地買収、拡張の背景にある。

現在の諸福工場の扱い高は月間4～5千㌧、代納扱い1～2千㌧前後。本社工場（月間4～5千㌧、代納扱い4～5千㌧前後）に迫る勢いである。

Next 10　Plan

西側隣接地を買収したことから工場敷地は約1.3倍強に拡張したが、ギロチン増設や置き場など加工・在庫設備の増強は行わない。工場前庭のグリーンベルト化（5月完成済み）や、買収敷地内部の植栽の増設、防音・防塵設備の増強など一連の「環境整備」を進め、数量だけでなく、企業の社会的な品格・品質実績でも業界のなかで伍していける強固な体質を構築する。